

鴉が飛ぶ (リメイク)

ベクセルmk. 5

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

交通事故で死んだと思ったら自称神にアカメが斬る！の世界に転生させられてしまった。

そんな主人公が幸せになる為、時には仕事に、時にはナイトレイドに、時には同僚に、時には・・・・睡魔に、全力で戦う物語。

これは武器商人が行くのリメイク作品です。

目次

狩人	0	64
アカネが聞く		61
激流	3	58
激流	2	56
激流	1	53
船上		50
V S アカメ		47
ド s		44
パトロン		41
取引		38
狩猟	3	35
狩猟	2	33
狩猟	1	31
獲物		27
一方その頃		25
首斬	3	22
首斬	2	19
首斬	1	17
悪意		14
記憶		12
同士		9
出会い		6
仕事		4
帰還		1

帰還

「ふああ、眠い」

ここは帝国のはるか西。西の異民族との攻防ポイントに作られた野営地。

「なぐにが少し殺せばブルって逃げてくだ！全然向かってくるじゃないか」

オネストに騙された。と悪態をつくのは一人の男。彼の名はクレエ。現在西の異民族相手に戦闘している帝国軍を率いている男だ。

帝国は3つの異民族に囲まれており、こうした小競り合いはいつものことなのだ。

「クレエ將軍」

背後から声を掛けられた為、振り向く。

「ああ、今行くよ」

くくく

「がはははははどうした帝国軍！逃げるだけか!？」

帝国軍は現在西の異民族相手に劣勢だ。異民族の重装騎兵と帝国軍の騎兵隊は幾度となく衝突しているが、騎兵の数が減り始めてから撤退は開始したのだ。

「いけいけえーそのまま本陣まで蹂躪しろお！」

本陣近くの谷まで帝国軍を押し込んだ異民族。しかし、谷の出口に差し掛かったところで帝国軍を見失った。

「くっそ！逃げ足の速い！」

谷といっても其処まで入り組んだ谷ではない。これは単純に馬の速度の問題だろう。だがもう少しで追いつく。そう思い馬の速度を速める異民族の指揮官。

カズイクル・ベイ

「極刑王」

瞬間、谷の出口を黒い杭が塞いだ。更に、谷の中で同様の現象が起こる。杭が急に地面から生え、馬ごと貫かれる異民族の騎兵達。杭によって削られた岩が落石となって襲いかかり、潰されるものもいる。

「て、撤退！撤退だあ！」

がしやがしやと音を立てながら逃げまわる異民族。馬も使えない重装備で逃げるのは無謀にも等しかった。

「急げ急げ急げ急げ急げ急げ!!」

突如逃げ回る異民族の兵士が倒れる。

谷のから奇妙な形の銃で攻撃してくる帝国軍の兵士達がいた。それは普通の銃弾とは違い、水色の光弾だった。被弾した場所が抉れ、貫かれる。

「はあ、はあ！急いで、本隊に伝えねば……!?」

目の前の光景に目を疑う異民族の指揮官。黒い杭の槍に串刺しにされた異民族本隊。そして、それを食い散らかす鴉の群れ。

「ははは、はははははははははは！」

その真ん中で笑う男。

帝国において、エスデスと並ぶ程の強者にして、悪魔と名高い將軍。

「暴君のクレエエ」

~~~~~

クレエエは転生者である。

交通事故で命を失ったと思いきや、神より二度目の生を与えられたのだ。転生するにあたって F a t e シリーズで出てきたサーヴァントと同スペックのステータスとスキル、宝具と魔術適性と魔術の知識を得て転生している。

ちなみにステータスはこうだ。

ステータス

筋力：B＋ 耐久：A 敏捷：B－ 魔力：E X 幸運：C＋

スキル

セイバー 魔力放出 A＋ 直感 A

アーチャー 千里眼 C 黄金律 A

ランサー 心眼（真） B カリスマ B

ライダー 騎乗 A＋ 軍略 B－

キャスター（宝具を無くして三つに） 陣地作成 B 道具作成 E X

大量生産 A

アサシン 気配遮断A+ (ON OFF可能) 医術A

バーサーカー 無窮の武練A 人体理解A-

しかも、神からはプレゼントとして、使い魔(鴉)のスキルまで得ている。

宝具と使用可能な魔術に関しては使いながら紹介していこう。

「クレールエ將軍、もうすぐ帝都です」

そんなことよりも帝都へ帰ってこれたのだ。

暫く異民族を潰さなくてはいけないのかと思っていたのだが、(オネストが直々に頼みたいことねえ。嫌な予感しかしないや)直感Aがそう告げているのだ。

## 仕事

「貴方にはナイトレイドを始末して欲しいんですよ」

帝都の宮殿のどこか。そこに呼び出されたかと思ったら、色取り取りの5cm程のミニチュアケーキ（実際食べれる）で作られた巨大なケーキを食べている死んだ眼をした豚……もとよりオネスト大臣にそう言われた。

オネスト大臣。現帝国の実質的な最高権力者。というのも幼い現皇帝を洗脳して好き勝手やっている層だ。

しかもただの屑ではなく、今の幼い皇帝を世継ぎ争いで勝たせた切れ者でもある。

「帰ってきてそうそう厄介なことを」

ちなみにクレールは正式な大臣派の將軍ではなく、気が向いたときや利害が一致したときのみ味方するということになっている。

「俺としても……ナイトレイドとは戦いたいと思っている」「ということとは」

意外そうな顔をするオネスト。そんなオネストに、平然と言う。

「それなりの報酬はもらう、覚悟しておけよ？オネスト」

~~~~~

「ただいま我が家よ！」

宮殿近くの高級住宅にクレールは住んでいる。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

出迎えてくれたのは目麗しいメイド達……人形工学と道具作成EXの髓を凝らして作られた、家事万能自動人形だ。因みに人間のメイドも一応雇っているが、完璧すぎる人形相手に絶望して引きこもってしまったている。

「ここで妻の一人でもいればいいんだがなあ」

今ばかりはノウケン將軍が羨ましいと思うクレール。そのまま屋敷の地下にある魔術工房へ入ると、テーブルに置かれた銃をとる。

ブルーブラスターMK.3。現在クレールの部隊で正式に採用している礼装だ。仕組みは普通の銃と大差ないが、撃ち出している攻撃

は勿論魔力。M240機関銃以上の威力の魔弾を毎分1200発放つことができる。更に貫通弾、炸裂弾、散弾、誘導弾まで発射可能。拳銃の果てには変形機構トランスシステムで狙撃から掃射まで可能なライフルだ。

「MK4開発には何が必要かねえ」

西の異民族との戦闘で使用した宝石を充填する。因みに、人形工学以外で使える魔術は、宝石魔術、ルーン魔術、錬金術、転換、降霊の7つだ。

他にも基礎的な結界の張り方、強化や治癒の魔術も使えはする。

くくく

『御夕食の御用意が出来ました』

礼装の製作や戦闘の準備をしていると人形メイドが呼びにやってきた。ダイニングルームまで行くと珍しいことに地方から売られた少女達、ルナ、ファル、エアの3人が座っていた。

彼女たちは人形メイド相手に完全に敗北し、心が折れてしまっている。が、中々に面白いので解雇にせずに3食おやつに昼寝と給料付きで住ませている。

「いただきます」

「いただきます」

3人の他にも屋敷の警備をしている人間の兵士と共に食事をとる。

今日のご飯はマッシュポテト。茹でたジャガイモを潰して塩をかけただけの料理だ。これを主食に、肉や魚の料理を自分用の皿に盛り付けるのが我が家の食卓のルールである。

(それにしても、この芋うまいな)

そのうち大臣を洗脳しよう。そうして主食を芋にする法律を敷いてもらおう。そう思った。

出会い

「ホクホクいもーぬ4つください」

昼ごろ。書類仕事を終わらせて帝都を散策しているクレールエ。

(やつぱこんな真昼間にはいないか)

別にクレールエは遊んでいるわけではない。現在進行形でナイトレイドを探しているのだ。

ナイトレイド。帝都の重役や裕福層の人間を標的とする暗殺集団だ。

「その実態は打倒帝国を掲げる革命軍の裏組織」

実際に標的となった者は皆汚職や地方の人間を騙して、拷問や暴行を加えるような屑どもばかりだ。

「連中に恨みはないが、帝具使いとは戦ってみたい」

はるか千年前に生み出された人知を超える、48の超兵器。ナイトレイドは判明しているだけで4つ持っている。

クレールエがホクホクいもーぬを食べながら歩いていると、一人の少年を見かけた。

正確には、茶色い髪に緑色の目をした165cmほどの少年が、兵舎から追い出されてきた。

「おーい、君。なにかあったの?」

「!クレールエ将軍!!実は……」

兵舎の事務員に尋ねると、先ほどやってきた少年が實力を見てほしいと、いきなり剣を抜いたらしい。

再び少年を見る。剣を背に背負っているところから、地方から出稼ぎに来たのだろう。

(おおかた、いきなり隊長クラスで仕官したいと言ったのだろう)

隊長クラスなら、確かに實力も必要だ。だが、真に求められるのは数十もの人間を指揮出来る統率力。その上、現在は不景気で雇える人間にも限りがある。

(……それを一から教えるのは、めんどくさそうだな)

「わかった。俺が見てやろう」

「本当か!？」

そういう少年と共に、人気のない空き地まで行く。道端で暴れていたら警備隊に捕まってしまう。

「ぎ、かかってきなさいな」

普通の剣を上段に構えたまま動かずに待つ。

「うおおおおおおお！」

少年は真っ直ぐ突っ込んでくる。クレーエは少年の振り下ろしてきた剣を、受け止めずに自分の持っていた剣を地面に落とす。

「なっ！」

いきなり丸腰になった事に驚いたのか、速度が落ちる。それに対してクレーエは剣先に手を添える。

「え？」

「皇拳寺で免許皆伝だからね、これでも」

少年の体が宙を舞っていた。呆気にとられた顔のまま背中から地面に衝突する。

「つってつって！」

痛みに呻きながらも立ち上がる少年。剣を拾い、そのまま先程と同じように剣を構える。剣と剣がぶつかり合い、鈍い金属音が響く。

「今度はこっちから行くぞ」

クレーエは少年がぎりぎり反応できる速度で斬りかかる。

「くっ！速ええ!!」

しかし少年はしっかりと反応する。上下左右関係なく、時には拳を、蹴りを混ぜ、攻撃するが、食らいついてきている。

「どりゃああああ！」

しかも反撃までしてきた。だが、クレーエはそれを紙一重で避けると、少年の持っている剣を持っていく剣で絡め取る。

「うおおおおお！」

しかし、絡め取られることを予想していたのか、今度は素手で殴りかかってきた。

「.....」

クレーエの顔に一撃、拳が入る。クレーエはその衝撃を皇拳寺の投

げ技の応用で逸らし、その場で回転する。その時発生した遠心力、少年の打撃の威力、踏み込んだ右足の衝撃を少年へと撃ち返す。

「天蜂」

「かはっ！」

少年は肺の中にある空気すべてを吐き出しながら吹き飛ばされる。

「やばー！殺しちゃった!?!」

そう思い、少年に近付く。

(外傷、無し。内部への衝撃による気絶)

安静にしていれば治る傷であったことに安堵しながら人払いの境界を張り、少年への書置きを書く。

「えーと、少年へ。君の実力は見させてもらった。対人戦闘能力の低さが目立つ。が、呑み込みの速さと身体能力、成長性は天賦の才があることは間違いなし。」

要約すると、そのまま鍛えれば將軍狙えるよ」

同士

夜、クレーエは家に帰ると、工房で礼装の調整をしていた。

「どうだ？帝都と西の異民族との攻防地点は離れているが、聞き取れるか？」

『・・・はい、問題ありません。少し・・・飛びますが、音は拾えています』

クレーエが指輪に声をかけると、指輪から声が返ってくる。

(指輪型の通信礼装。まだ問題点は多いが、一応は完成か)

「そっちの状況は？」

『はい、左翼側が奇襲を受けた際に少し後退。しかしすぐに押し返せます』

「よろしい。一段落ついたら帝都で俺の補佐に回れ」

『え？私が、ですか？』

話し相手の少女が驚く。そんな彼女に対して、クレーエは一から事情を説明していく。

『確かに私は、対帝具使い用に戦闘調整が施されておりますが・・・ナイトレイド程の猛者ともなると・・・』

「問題ない。そもそもナイトレイドにはもう少し・・・オネストを殺してもらうまでは存在してもらわないと困るからな」

『・・・了解しました』

~~~~~

宝石が灰となり、通信礼装としての効力を失った指輪を握りつづす。

「セノア様」

「ええ、私も敵を視認しました。ありがとうございます」

セノアと呼ばれた女性は長い金髪をと軍服のスカートを翻しながら、敵のいる方向とは別の方向をみる。

「第3機構腕作動。『私は、理の枷から離脱する』」

いつの間にか、セノアには4本の腕が生えていた。そのうちの一本、3本目の腕が紫色の光を放ちながら、内部機構を稼働させる。自

動人形であり、道具作成EXによって生み出された礼装兵器を所持している。

「まずは先制攻撃しましょう。大丈夫です、ただか瓦礫や岩を砲弾代わりにするだけですから」

セノアが目を向けていた場所にある岩が宙に浮いた。

「攻撃開始」

くくく

「少年、芋は好きかね？」

朝。クレールはある貴族の屋敷に忍び込んでいた。正確には地方から来た人間を親切を装い捕らえていると噂をされている貴族の屋敷。と、その屋敷にある倉庫。

目に映るのは手足の欠損した人の死体に拷問器具の数々。それと檻に捕らわれた人々。

しかも薬物の中毒症状のような痙攣まで起きている。

「あんた、何者？」

近くの檻の中からハチマキを着けた少年が鉄格子を掴みながら、か細く震える声で話しかけてきた。

「質問を質問で返すなあー！」

少年の入っている檻を蹴り飛ばす。倉庫にはあらかじめ防音のルーンと人避けの結界を張っている。

「す、好きだ！芋が好きだ！」

「そうか。ならば同志よ、願いを言え。望みを叶えてやろう」

クレールは少年を見ながら問う。

(ルボラ病の末期。しかも何らかの薬物中毒あり・・・助からんな)

もし、自分を助けてくれと言ったら、知覚されない速度で殺そう。とクレールは考える。しかしその考えは杞憂に終わった。いい意味で。

「サヨを助けてくれ!! 俺と違ってまだ助かるはずだ！」

少年が檻の外に腕を出して宙を指差す。少年が指差した方を見ると片足を切断され吊るされている少女の姿があった。

かろうじて生きているがこのままでは出血死するのも時間の問題

だろう。

「その願い、聞き入れた」

少女を吊るしていた縄を切ると着ていたスーツの袖を千切り、止血を行う。そのまま、戦闘用に仕立てた黒いロングコートを少女に被せる。

「因みに、名前は？」

「ああ、俺の名はイエヤスだ！」

「そうか。俺はクレールだ。芋好きのよしみだ、覚えておいてやろう」

## 記憶

「未だに目を覚まさないか？」

『はい』

昨日、芋同志イエヤスの頼みで助けた少女、サヨの様子を見ていた自動人形から報告を聞いていた。

治療としては、斬られた脚の止血。その後の義足への交換、鞭の後や刺し傷等は、治療後に人形用の人工皮膚を人間用にしたもの貼り付けて傷も隠してある。

「これから俺は工房の整理をするから、引き続きサヨを頼む」

『了解しました』

そう言つて地下にある工房へと入る。

くれーえの屋敷には4つの工房がある。一つ目は錬金術用の工房。ここは最近使用していないことから、特に念入りに掃除が必要でもある。二つ目は鍛冶工房。金属製品を多く扱う人形ドールエンジニアリング工学や武器を一から作る為にも必要な設備が全て整っている。三つ目の人形用の工房。ここに至つては帝国一清潔である。自動人形オートマタに使われる極小サイズのパーツはどれも埃一つで異常を起こす。工房のクリーンルームにはかなり気を使つたし、力も使つた。

最後の四つ目は総合的な魔術工房。宝石魔術やルーン魔術の研究にはこの工房を使う。

「さて、どこにやつたかな？」

今クレーエは、大臣に一度だけ見せてもらった、帝具の文献の写しを探している。

(それにしても)

目の前の作業台を見る。第四工房も相当散らかつていた。一般人には落書きにしか見えない礼装兵器の設計図、ルーン文字や魔法陣の書かれた紙、何らかの薬品が入った瓶、表側に鴉の描かれた7枚のコイン。他にも、味方に引き入れた武官や文官のリスト、買い上げた鉱山関係の書類等、魔術とは全く関係ない書類まで置いてあった。

「えっと、設計図はこっちの棚。この薬品は錬金工房。このコインは

使えもしない占星術の練習に使った奴だな。このリストは私室で、こつちのは宮殿の執務室……全く、アンゼルス爺やも鉞山ひとつ丸々くれなくても」

帝国経済の重鎮なのか、ほんとに。と、愚痴を漏らしながらも片付けを続ける。

「……………なんだこれ？」

それは一冊の古ぼけた手帳だった。それは始めて見る筈なのに、ひどく懐かしく感じた。よく見ると葉が挟まってるのに気が付きた。

恐る恐る、そのページを開く。

「……っ！」

突然、激しい頭痛がクレーエを襲った。

「な、んだこれえええ！」

頭痛と共に様々な情報がフラッシュバックする。

幼い頃の事、自身に石を投げる人々、それを庇う一人の女性。

「……！」

頭痛が治まると、クレーエは手帳を作業台に置いたまま錬金工房へと行く。

『ご主人様、彼女が目覚めました』

~~~~~

「記憶が無い？」

「はい。私が何故帝都に来たのか、何が出来るのかが分からないんです」

夜、クレーエは目が覚めたサヨと食事を摂りながら、話をする。

「それにしても、帝都ではジャガイモを主食に食べるのですか？」

「いや、家が特殊なだけだ。にしても、このスーパージャガ王はうまいな。さすがはゴードン元隊長だ」

クレーエは退役後に帝国の東で農家をしている壮年のかつて部下の事を思い出しながら芋を頬張った。

悪意

「あっはっはっはっはっはっは！午前中は書類仕事だけとか、楽しいなあ！」

朝9時。クレイエは宮殿の執務室で書類整理をしていた。

その隣ではクレイエを補佐するクレイエと同じ見た目の人形。

ドールエンジニアリング

人形工学を使えば自身の分身となる人形を作ること可能だ。し

かし、人形はクレイエよりもステータスが一段階下回る。その上宝具も使えない。

(まあ、強すぎると神に干渉されるからな)

本来ならクレイエは星の開拓者や天賦の叡智、マハトマや根元接続等のスキルを取得する筈だった。

だが――

『チートスキル選んだり、パワーバランスが崩れたら、抑止力働くから、気をつけるんだぞ♪』

「なーにが『気をつけるんだぞ♪』だ！いくら神でも俺の好みの女性像でんなふざけたこと言ってるじゃねえ！」

書類仕事を終わらせ、デスクテーブルに拳を叩きつける。

「あーイライラする。警備隊行ってくる」

くくく

帝都警備隊。名前の通り帝都全体を警備する警察部隊。今回クレイエはその隊長であるオーガに用があつてやってきた。

「お疲れ様です！」

ビシツと敬礼をする帝都警備隊隊員。

「オーガ、いる？」

「それが、現在来客中にして……」

「おお、それは都合がいい！セリユー。セリユー隊員！オーガのここまで行くぞー！」

「へ？あ、はいっ！」

近くにいた隊員のセリユーを引き連れてオーガのいる場所まで向かう。

「あ、あのく將軍。なんだか機嫌が良さそうですね？」

「ん？そう見えるか？」

「は、はい。とても」

「まあ時期に分かる。ところでセリユー隊員、正義とはなんだ？」
隣を歩くセリユーを見る。

セリユー・ユビキタス。帝都警備隊のヒラ隊員でありながら、帝具『魔獣変化ヘカトンケイル』を所持している帝具使いの隊員だ。

彼女は父親を賊に殺された過去があり、それ以来「正義対悪」という極端な価値観を持っている。

「はい！悪に対して勝利する力の事です！」

「・・・そうか。っと、ついたついた」

話し込んでいるうちに、オーガとオーガの客人のいる部屋へとたどり着いた。

「・・・入らないのですか？」

「ああ。ここまで来ることが目的だったからな」

そう言いながら目を閉じる。イメージは宝箱。閉まりつつある箱の中から、もつとも価値のある代物のみを奪い取る。

「奪え、望むままに」

瞬間、人払いの結果を廊下に張り、扉に盗聴用のルーンを描く。

『オーガ隊長、この前はお世話になりました』

『なんのなんの！こつちもいっぱいもらっているからな！』

これをする、部屋の会話は筒抜けとなる。

『いやはや、帝都警備隊の隊長が、これしきの金で濡れ衣を着せてくれるとは』

「え？これって・・・」

青ざめた顔のセリユーがクレールエを見る。きつと信じられないのだろう。自分が尊敬していた上司が賄賂を受け取って、罪をもみ消していたなどと。

「ではセリユー隊員に問おう。汚職とは悪か？悪ならば何をすれば正しいか？」

その答えは、火を見るよりも明らかだった。

首斬 1

「う〜が〜！忙しい！」

唸りながらもてを止めることなく動かし続けるクレイエ。

帝都警備隊死亡。指揮系統が損失された為、現在はクレイエが警備隊の指揮ならびに隊長の業務を代行しているのだ。

「あー。セリユーも離反するし、イヲカルが殺されたせいでオネストにはネチネチ言われるし、首斬りザンクはまた出現するし……ん？」

思わず読み流してしまった書類を再確認する。

〜

首斬りザンク。

元は帝国最大の刑務所で首切り役人をしていた男。

しかし、大臣の所為で次第に処刑する人間が増えていった。それでも彼は処刑する人間の首を斬っていった。何度も、何度も。繰り返し繰り返す。

命乞いをする人間の首を斬っていった。

それが何年も続くうちに、首を斬る事が癖になった。

「それが辻斬り魔になるなんて、全くはた迷惑な」

そう言いながら、デミ・サマーイモのタルトを齧る。現在クレイエは宮殿内の執務室を離れ、自宅の工房の中で準備をしていた。

「しかも、所長の持つ帝具『五視万能スペクテッド』を強奪。討伐隊が組織された直後に消息を絶つ」

溜息を吐きながらも対策を考える。

(スペクテッドの能力の1つ、遠視は夜間や霧の中でも左右されずに遠くを見渡せる。なら、この薬はいらんか)

灰色の薬液の入った小瓶をコートから取り出す。この薬液は一滴地面に垂らすだけで半径30mの空間を、薬液の効能を持った霧で満たす事が出来る礼装だ。灰色の薬液は濃霧を、赤い薬液は爆薬、黄色は簡易的な暗示、洗脳用の催眠香など、汎用性も高い。

「透視の能力でどんな武器を持っているかはバレルから、コートに仕

込む武器は制限したほうがいいな。それよりも、幻視、洞視と未来視の対策より先に、ザンクを探さねば」

そう言いながら工房を出て、庭へと行く。

「あ、」

「ん？サヨ、どうかしたのか？」

ちなみに、現在サヨはメイドとして雇っている。

(記憶喪失になって何が出来るかわからなかったから雇ってみたが、戦えるんなら軍に入れてもよかつたな)

「えつと、いいんですか？私が副メイド長なんて」

「いいよいいよ。掃除も全部——」

「お願いします！ヒラでもいいのでやることをください！芋の皮むき、芽取りでいいから仕事をください！」

くくく

「うわーまた増えた！もうお前ら住み着くのやめれ！」

ここは異世界ですか？

そこは帝都随一の高級住宅の庭とは思えないほど、異形めいていた。

侵入してきた人間の死体で餌付された植物型危険種と礼装がそのまま生えており、花壇には毒草薬草、麻薬用の植物が所狭しと植えられており、手入れを怠った巨大な桜は枯れ果て、住み着いた鴉と黒猫、蛙と蛇の溜まり場に。いつもいつも、かあかあにやあにやあ、ゲコゲコシユウシユウの大合唱。

「いくら結界と幻術映写機で誤魔化しが効いても……俺は嫌だぞこんなカオスガーデン」

使い魔（鴉）の効果によって鴉には念じるだけで使い魔として使役が可能だ。

(このあと警備隊を10人編成で夜間警邏させつつ、市民に紛れさせた人形を使って夜の警備網を作るか)

首斬 2

ザンク出現から2週間。

「なかなか見つからないな」

現在クレールは宮殿内の執務室で帝都の裏路地を見ていた。

使い魔として使役している鴉と視界を同調してザンクを探しているが、裏路地にすら姿を現していない。

にもかかわらず被害者は増えていく一方。警備隊からも被害が出てきている。

「やっぱセリユーが離反した穴は大きいな。早々にあいつを引き戻すか」

~~~~~

「はくあ。忙しいなあ」

ウエーブのかかった長い金髪に黒いビジネススーツを着込んだ女性のため息を吐き出す。スーツの胸元には赤い鴉のバッチが付いている。

ここは帝国のはるか南に存在する革命軍本部。彼女は革命軍の密偵隊のメンバーの一人だ。いつも真面目で正義感の強い女性で通っていることで有名である。

——足元に、革命軍の重役の死体が無ければ。

「仕事は仕事だからいいけど、バレたら殺されるし、チエルシーみたい  
に帝具持っていないから逃げ切れる自信ないし……ん？」

頭を抱えながらうろろしていると、窓の外から鴉が飛んできた。よく見ると、鴉は手紙を銜えており、それが彼女宛であることが伺える。

「はーあ。この忙しいときに」

ま、あのカラス君だから仕方ないか。とつぶやきながら手紙を受け取った。

~~~~~

夜。夜間の外出禁止令の布かれた街は人が一切無く、不気味な静けさを漂わせていた。

「奪え、望むままに」

魔術行使のスイッチを入れ、ザンクへ憎悪を抱く人間の霊を呼び出し、手のひらサイズの人形に憑依させる。

(30機位動かしてるから1機位あたりを引いても……………)

そのとき、ガキン!という金属音を聞いた。

「……………!」

音のしたほうへ、走る。

そこでは、一人の少年と、奇妙な目の形をした装飾品を付けた大男が戦っていた。

「おやおや?とんだ珍客が来たものだ」

「貴様がザンクか?」

こちらに気付いたザンクが振り向くと、黒い奇妙な仮面をつけた男が立っていた。

「我が名はゼロ。貴様を倒しに来た」

そう言つて、剣を構える。

「ふはははは!これはこれは、愉快的男だ!」

ザンクも駆け出し、剣を振り下ろす。それをゼロは避け、反撃と言わんばかりに、横に薙ぐ。

ザンクはそれを後ろに下がって避ける。

「それが帝具の能力か?」

一気に踏み込み、突きを放つ。が、剣をで防御される。

「……………!」

「どうやら、仮面越しでは洞視は出来ないようだな」

「だがまだ未来視がある!」

斜め上からの斬り下ろし、膝蹴り、拳打、刺突を繰り返す。が、まるでそこに攻撃が来ることが分かっているかのように回避される。

「ちつ。やはりあと一手足りないか」

「何手繰り出そうが無駄だ!そのまま首を切り落として、仮面を剥いでやろう!」

そう言いながら首に当たるように振るわれる剣。

石畳から急に刃が生えて来なければ、剣はゼロの首を斬り落として

いただろう。

「やはり未来視にも限界があるようだな。条件はクリアされた、後は
貴様を狩るのみだ！」

首斬 3

ギイン。と、鈍い金属音が響く中、タツミはザンクと、ゼロを名乗った男の戦闘を眺めていた。

「……………」

ザンクの一撃をゼロは避けることなく受け止める。それも先ほどまで持っていた剣ではなく、剣と同じ形をした黒い棒でだ。

「くそっ！」

「いいのか？足を止めても」

シュピっ。音と同時に石畳が刃と化す。

「ぐっ！貴様あああああ！」

叫びながら突っ込んでくるザンク。それに対してゼロはどこから取り出したのか、白い布を取り出すとザンクの盾になるように、広げる。

ザンクは布ごとゼロを切ろうとするが、布は鈍い金属音を上げて剣を弾いた。

「なっ!？」

「ルートを絞ったのが仇となったな。これじゃあ倒してくださいと言っているようなものじゃないか」

鉄すら上回る布ごとザンクを殴るゼロ。その後、カシヤリという音と共に、腕から刃が生えた。そのままザンクの腹部を突き刺す。

「義肢……だど？」

「機械相手には未来視は通用しないようだな。勉強になったよ」
「くっ、くそおおおおおおお！」

左側の剣でゼロに斬りかかる。もはや死ぬことは分かっている。それでもゼロだけは殺すという執念の一撃だった。

シユトラセ／ゲーエン
「理導／開通」

しかし、ゼロが剣に触れた瞬間、剣が碎け散った。

くくく

(ここで、終わるのか?)

ザンクは自身の過去を見せられていた。

何度も、何度も、首を切り落とす。命乞いをする人間の首を、何度も斬り落とす。

首を切り落とすたびに声が聞こえる。

『お前もこっちに来い』と、殺してきた人間の声が聞こえてくる。その中に、聞き慣れない声が聞こえた。

くくく

「まだだ！」

右側の剣でゼロを斬りかかるザンク。本来なら防御する予定だった。しかし、何故かゼロは回避した。

——まるで、この攻撃を避けねば死んでしまうような、そんな攻撃だった。

「なんだ？」

近くで見ていたタツミも異変に気が付いた。

(ザンク……の中に何かいるな。それもかなりヤバい奴が)

「では、逝くぞ！」

いつの間にかザンクは袖から生やしていた剣を両手に持ち直していた。

「——！」

振るわれた剣を避け、こちらが斬りかえす。しかし、振り下ろされた剣を引き戻して、防御する。

(直感と心眼(真)でなんとか動きをみているが)

ザンクに憑依している存在が強すぎる。肉体は完全にザンクの物だが、技量は確実に憑依している存在の物だろう。

(これ、アカメに憑依されてたら死んでたな)

首を切り落とすに足る斬撃を紙一重で避けると、ポーチから幾つかの宝石を取り出す。

「爆ぜよ！」

その一言で宝石が光り始める。

「無駄だ！」

8つ投げた宝石のうち、5つを爆発する前に剣で弾く。残りの三つは剣を盾にして防御する。

直後爆発する。

」
宝石の爆発も意に反さずに、接近するザンク。

「終わりだ」

「いや、間違っているぞ」

ゼロはザンクの胸部を指さす。そこからは血が溢れていた。

魔術礼装、無刃の魔剣。

宝石内に溜めこんだ魔力を刃状に展開、攻撃を可能とする指輪型の礼装だ。

(もつとも、詳細を知ってる連中からしてみれば手品以下の子供騙しだがな)

だが、何も知らない者からしてみると、脅威でしかないだろう。

「さて、帝具を回収しよう」

素晴らしいながら帝具を回収する。

それにしても――

(まるで、ザンクに山の翁か湖の騎士を無理やり憑依させたみたいだな)

もし仮に、こんな事が出来るのは――

一方その頃

「さて、悪い知らせだ」

帝都から北に10 km離れた地点。そこにナイトレイドのアジトは存在する。

現在はボスであるナジエンダが、メンバーを会議室に集めていた。

「クレエが五大将を招集した」

「はあ!?! まじかよあいつ!」

ラバックが戦慄し、アカメやブラートも動揺した。

「と、いつてもカミラやヒルダのような怪物やT Tティーツィのような得体の知れない奴を呼んだわけではないが……」

床を睨みながら呟くナジエンダ。

「なあボス。そんなにヤバい奴らなのか? そいつら」

最近来たばかりのタツミが質問する。

「帝具使いは一人もいない。だが、我々相手に互角の戦いが出る」

「そんなやばいのが……!」

「しかもそいつら一人一人が將軍並みに指揮能力が高い」

ナジエンダは革命軍の本拠地へ行って、戦力を増強するべきだと考える。

(とはいっても、ナイトレイド自体が強力な戦力だから、難しいな)

「それで、誰が来たんだ?」

アカメの質問で、意識が現実へと戻される。

「ああ。帝都へ来たのはロランとセノアだ。内、ロランは直属の部下の騎士団を500人帝都に連れてきている」

「となると、セノアは一人で来たのか」

アカメの言葉に頷くナジエンダ。

「ロラン、セノア共に強力だがこれはチャンスでもある。倒せば帝国一の機動力を持つクレエ軍を弱体化出来る。だが、1対1ではなるべく闘うな」

くくく

「……………」

帝国東南部のベンナム山脈。

ここでは現在、巨大な蟻型の危険種が大量に発生していた。

特級危険種ベンナム軍隊アリ。100体ほどの群れならば超絶危険種すら食い殺せるほどの戦闘力を有する。

「歩兵隊総員、対軍防御陣形。砲兵隊、砲撃開始」

砲撃が放たれ、アリの足元に着弾。爆発して先頭にいるアリが吹き飛ばされる。しかしアリの数はさして変わらない。100を超えて千体以上のアリが押し寄せて来ている。

「宝石地雷作動。並びに銃撃開始。ライン1到達までに少しでも削りなさい」

陣形の正面で指揮を執っているのは白いビジネススーツを着た女性。

「カミラ様！帝都より伝令！帝都より伝令！」

カミラと呼ばれた白スーツは、伝令を伝えた兵士に、無言で先を話すように促す。

「対危険種殲滅師団団長カミラ、至急帝都へ帰還せよ！」

「……………つまりとつと殲滅しろと。はーあ、私を作ったものながら、私の実力を過信しすぎではないか？」

まあいい。とため息を吐きながらも戦闘出来るように準備する。

「ブルーブラスタープロトタイプ改」

放たれた攻撃は、通常のブルーブラスターが魔弾スナッパなのに対し、大砲ドロワだった。

ゴウツという砲撃音と共に放たれた一撃はアリ数十体が一撃で消滅した。

「とんでもないブラック野郎に作られてしまったようだな、私は」

獲物

夢を見ていた。肅々とした、洗練された、黄昏のような夢を見ていた。

「やほー。元気元気？」

黒いスーツ、長い黒髪、全体的に細く見えるが、細く見せているだけの抜群なプロポーシオン。

貞淑でありながら威厳のある女性なのだが、中身がアツパーテンションでコミカルな女神だから台無しである。

「なにこれ？」

しかもこの空間そのものが妙だった。

ウサギとカメが機銃やらミサイルやら何やらを乗せながら戦争をしているのだ。

———なんなのだこの、コミカルだがマッドでバッドな世界は……

「今の私の心情を現してるんだよっ！」

「貴様の仕業か！」

しかもクレエの姿も変わっていた。

ジャージ姿に五号と書かれた紙袋をクレエは被ってこの世界に招かれていた。

「さて、ほかの神様にこうやって密会しているのがばれたら、さすがにまずいから、要件を言うね？」

「最初からそうしろ」

「ザンク君に英霊の霊基を代入したけど、すぐ死んじゃうみたいだから、抑止力として使える転生者を送り込むことにしたの」

これからは私に介入されたいように、静かに幸福を目指しなさい！
その言葉と共に、クレエの意識は闇に沈んだ。

くくく

朝、クレエは屋敷の寝室で目を覚ました。

なんだか、とても不思議な夢だった。コミカルだがマッドでバッドな世界で集合無意識と話をしていたような……

コンコンツ、とドアがノックされた。

「閣下、失礼致します」

「ああ、少し待て」

そう言いながらいつも着ているものと同じスーツに着替える。その上戦闘用コートに装備を付ける。

「セノア、おはよう」

「はい、おはようございます。閣下」

ドアを開けると、青い軍服を纏った金髪ツインテールの女性が立っていた。

「TTから機密文書が届いております」
ティーツー

「ああ、読む読む。ようやくナイトレイドのターゲットについて調べてくれたんだ」

セノアが持ってきたのは、革命軍にスパイとして潜入させていたTTから送られたナイトレイドの標的となっている人物のリストだ。

「麻薬の密売人に、闇商人……こいつ爺やの傘下の奴だ。他にもいろいろいるな」

「いったいそんなもの、どうするおつもりですか？」

セノアが小首を傾げながら、尋ねる。

「ふふふ、じきにわかる」

~~~~~

宮殿内——謁見の間。

「申し上げます。ナカキド將軍、ヘミ將軍。両將軍が離反、反乱軍に合流した模様です！」

現在クレエは、オネスト大臣と皇帝、文官達と共に帝国軍兵士の報告を聞いていた。

「戦上手のナカキド將軍まで……………」

「反乱軍が恐るべき勢力に育っているぞ……………」

「早く手を打たねば……………」

口々に不安を漏らす文官達。

「うろたえるではないっ!!」

そこに皇帝が立ち上がり、マントをはためかせる。

「所詮は南端にある勢力……いつでも対処できる！」

クレールエは直感よりも早く、心眼（真）で読み取った。

（大臣の入れ知恵だな）

「反乱分子は集めるだけ集めて掃除した方が効率が良い!!……で、よいのだろう、大臣」

「又フフ……さすがは陛下、落ち着いたものです！」

案の定オネストの入れ知恵だった。

「ともかく、今は遠くの賊よりも近くの賊です。クレールエ将軍」

「ええ。現在五大将の一人、TTが反乱軍で工作をしています。すでに位の高い指揮官を暗殺しています」

クレールエの報告を聞いた文官達が驚きの表情を浮かべる。

「ほう、もう動いていましたか。なら北を制圧したエスデス将軍を引き戻しましょう」

エスデス将軍の名が出た途端に何人かの文官が焦った表情を浮かべる。

「て、帝都にはブドー大將軍、クレールエ将軍がおりましょう！」

「それに、五大将の一人であるロラン騎士団長も呼び戻したことですし……」

「大將軍が賊狩りなど彼のプライドが許しないでしょうし、何よりもクレールエ将軍は帝都警備隊の最高責任者も兼任しています」

「エスデスカ……」

陛下が考えるようにその名を言う。

「彼女ならブドー、クレールエと並ぶ英傑……安心だ！ 異民族40万を生き埋め処刑した氷の女ですからな」

（そんな物騒な女の何処に安心出来る要素があるんだか）

「將軍。生死は問いません！ 1匹でも多く、賊を狩りだし始末するのです!!」

「もちろん。ただ、賊だけではなく帝都に住む犯罪者らも、同時に狩りましょう」

「うむ！ クレールエ、裁量は任せる。民たちの安寧のために頼んだぞ」「お任せください」



裁量を任されたこの機会を使わない手はない。  
少し予定を繰り上げて、腐敗した貴族を狩ることにした。

## 狩猟 1

「さて、俺も俺で準備をするか」

そう言いながらコートを脱ぎ、作業用の机の上に乗せる。

ここはクレーエの自宅内にある工房。現在はナイトレイドの標的となつている組織へ攻め込むための装備を考えていた。

(もしナイトレイドと遭遇したとしても、なるべくは殺したくない)

理由としては、ナイトレイドの拠点や他の構成員の情報吐かせるためだ。

「まずは雷芯とレッドスケイルは必須だな」

雷芯と呼ばれた針状の道具をコートの中に入れて6本程仕込む。この礼装は直接戦闘時に剣としても使用可能なスタンガンのようなものだ。但し、人間がすぐに気絶するレベルの電流が流れるため、扱いには注意が必要である。

次いで持つていくレッドスケイルは、クレーエ専用のブルーブラスター系の魔弾銃である。クレーエは銃等を手で持つて使用することを好まない為、ガントレットに付けて使っている。

「殺傷能力が落ちるな」

そう言いながら薄い、炭素製の刃が付いたナイフを持つていく。

電磁硬化式炭素剣。カーボンソード普通の剣と打ち合っても刃こぼれ一つしない強度を持ち、鎧すら切り裂く切れ味を持つ。

その次にコートに仕込んだのは鉄並みの硬度を持つ糸の束だ。これはカラリパヤットと呼ばれる武術を使う異民族の技と共に盗んだ、ウルミンという武器を模した礼装だ。束ねて槍や盾、剣としても運用可能だ。

「さて、行きますか」

くくく

「將軍、包囲完了しました」

「よし、ナイトレイドも来てないみたいだし。包囲しつつ突撃！虫一匹逃がすべからず！」

「了解!!」

帝都警備隊とは別に、鎧姿の兵士たちが槍や剣を構えながら突撃する。

彼らはロランの率いている戦闘部隊、騎士団である。

「西の王国を出て、仕事を続ける気分はどうよ？」

クレーエは自分の隣で騎士団の指揮を執る老齢の男に尋ねる。

「楽しいですとも。こういった虫を潰すのは」

「毎日水みたいな麦粥食べてるだろ。芋を食べ、芋を」

ちようど制圧し終わったのか、投降した護衛として雇われていた傭兵を縛り上げていく。

「よし、拠点にあった物のリストを作って、明日提出するように。解散！」

「了解!!お疲れ様でした!」

敬礼し、拠点の中に入る騎士団。彼らはクレーエ軍の中でもクレーエと帝国への忠誠心の高い者のみで構成されている。

(まだ始まったばかりだからいいとして、この先もこうだと少しまずいな)

この作戦も全て、ナイトレイドを捕まえるためのものだ。

「この先も来ますかね、ナイトレイドとやらは」

「来てもらわねば困る」

## 狩猟 2

「やっとみつけました」

とある夜中。人通りのない街の公園で、対峙する3人の女性。

「こいつ、急に空から!」

「気を付けてください、マイン。彼女人間じゃありません・・・多分」  
ツインテールの少女と長髪の女性がすこしばかりの動揺を見せる中、相対した金髪碧眼に、青い軍服を着た女性、セノアは二人を睨む。  
「手配書の似顔絵と顔が一致したため、ナイトレイドのシエーレと断定。もう一人も手持ちの帝具より仲間と判断。敵は二人、閣下は捕獲せよとの命令でしたから、手加減しませんと」

「なっ——」

「それは・・・」

セノアには、4本の腕が生えていた。

「初めまして。クレール軍所属、機動砲兵師団、団長のセノアです。分かりやすく、五大将と呼んでください」

~~~~~

「マイン、どうしますか?」

シエーレは隣にいるツインテールの少女、マインに尋ねる。

「どうもこうも、姿を見られた以上やるしかないでしょ」

そう言いながら自身の帝具、パンプキンを構える。

「あまり私を舐めないで下さいね!」

どこから取り出したのか、剣を構えながら駆ける。すると、シエーレが前に出てくる。一本目の右手で持った剣を振り下ろすと、それを巨大な鋏で受け止める。

「それはこっちのセリフよ!」

その隙間を縫うように放たれたパンプキンの狙撃が、セノアに直撃する。シエーレはその際に発生した衝撃で、マインのいる少し前まで後退する。

「その程度ですか?」

セノアは無傷でそこに立っていた。よく見ると、軍服の袖が少しだ

け炭化していた。

「輻射波動機構稼働」

赤く染まった左腕の一つを構える。輻射波動機構義腕。マイクロ波誘導加熱ハイブリッドシステムを魔術的に再現したものだ。左掌から高周波を短いサイクルで対象物に直接照射することで、膨大な熱量を発生させて爆発・膨張等を引き起こし破壊するというもの。掴んだ敵の武装の加熱破壊の他、輻射波動によって発生する振動波によって砲撃からセノアを丸ごとガードする障壁としての使い方もある。

他にも様々な機能を持った義腕を3つ搭載している。

「厄介ね、あの腕！」

「メイン、落ち着いて。焦っては向こうの思うつぼです」

「随分と落ち着いていますね。だから、焦ってもらいます」

そう言うと、茶色い布に包まれた筒を取り出した。それを左手で持つと、輻射波動で加熱する。

ドシンン！という音と共に黒い球状の物質が打ち上げられる。それは空中で鮮やかな色の閃光を放ちながら爆発する。

「後、5分もしないうちに援軍が来ますよ？頑張って私を壊して下さいね？」

狩猟 3

「まったくあいつは」

そもそも普通輻射波動で花火を上げるか？勿体ないだろう。

クレールはロランの率いる騎士団の数名と、帝都警備隊の隊員を連れてセノアとナイトレイドが戦っているであろう場所まで走っていた。

「ロラン、騎士団を使って公園を包囲。俺は直接援護に行く」

「承知した。御武運を」

くくく

「シエーレー！」

「わかってます」

マインの放つパンプキンの一撃を輻射波動によって発生する振動波でガードする。

シエーレーの攻撃は防御せずに、回避に専念する。

(やはり強い。戦闘調整を施しただけでは、食いつくのがやつと………)

「………」

セノアは軍服のポケットから何らかの薬が入った瓶を取り出すと、勢いよく投げつける。

「邪魔よー！」

それをマインが撃ち抜き、中の液体が霧状になる。

先ほどセノアが投げつけた瓶の中に入っている薬品は万能溶解薬だ。

「へ？」

霧に触れたシエーレーの服が急に溶け、肌が炎症する。驚きと痛みからか魔の抜けた声と共に立ち止まるシエーレー。それに対して踏み込むセノア。

「終わりです」

輻射波動機構腕で攻撃しようとする。出力は最低、気絶させる。

「っ！^{エクスタス} 鉈！！」

即座に体勢を立て直し帝具の奥の手を発動する。

「――発光金属!？」

思わず防御態勢をとる。放射波動を使わず、両腕を交差させて。通常の鉄なら防御できただろう。しかし万物両断の刃は容易くセノアの腕を切り落とした。

「人形なのに、血が!？」

「出ますよ。私は限りなく人間に近い人形なんですから」

切り落とされた腕の切断面から、長剣サイズの針が飛んでくる。それを器用に掴み、シエーレに向かって突き刺そうとする。

「させるか!」

砲音が轟き、光がセノアの腰を撃ち抜いた。瞬間、糸が切れた人形のように倒れたセノア。

「姿勢制御器が、破壊された?」

倒れたまま起き上がれなくなる。肩の稼働歯車に異常は無い。なのに腕が動かない。さっきの一撃で脊髄円筒メインシリンドラに罅が入ったのかもしれない。

「失敗したかな、私」

「いや、成功だ」

~~~~~

「――っ!」

シエーレが振り向くと、そこには雷芯を持ったクレーエが立っていた。

雷芯が腕に押し当てられ、電流が流れる。人間を平然と気絶させるに足る電撃を受け、倒れる。

「シエーレ!」

「確保」

気絶したであろうシエーレを縄で拘束し、マインに目を向ける。

「こんのおおお!」

パンプキンの標準をクレーエに向け、発砲する。將軍との一対一という状況がピンチなのか、かなり威力の高い一撃をクレーエは

「温い!」

素手で弾いた。  
悪竜(アーマー・オブ・ファヴニール)の血鎧。クレーエが転生した際に神から貰った宝具の一つ。

ただ、無傷と言う訳には行かず、手からうっすらと血が出ている。

「こんな・・・勝てる訳・・・」

「問答無用だ。気絶してもらおう」

クレーエは自身の敏捷に加え、魔力放出によるジェット噴射で距離を詰め、マインの背中を蹴り飛ばした。

「あ、ロランに譲ってやればよかったかな？」



## 取引

「はーあ、最悪だ」

クレーエは負傷したセノアの状態を見て、ぼやいた。  
(基礎骨格の一部が破損、それに切り落とされた機構腕も半壊……)  
これは金以上に時間がかかる。

「とりあえず基礎骨格の修理からだな」

とはいえ作るための素材をどうするか。量産型の戦闘用人形に採用しているのはこの世界特有の特殊な金属を用いた合金。それ以外の……カミラのような純戦闘用女性型には超級危険種の骨や帝具に用いるようなレアメタルを使ってる。

だが、セノアは違う。彼女は元は非戦闘用メイド型人形を戦闘用に調整しただけだ。

「思いのほかうまくいったと思ったが、そうでもないのか」

くくく

浪漫砲台パンプキン。

かつてクレーエの上官だった女性、ナジエンダが使用していた帝具。使用者の精神エネルギーを消費し、エネルギー砲、所謂レーザーを放つ帝具。

「今のその持ち主が、お前みたいな奴とは」

「……っ！」

現在クレーエは工房の隣に作られた地下牢にいた。そこにはマインとシエーレが捕えられていた。

「マイン……だったか？取引しよう」

「なんですって？」

両腕を吊り上げられた状態のマインが睨みつけてくる。

「今から渡す装備を付けた状態である人物を殺せ。それで帝具なしの状態で解放してやる」

「正気？」

「うん」

驚きを通り越して呆れ顔のマインに対し、クレーエは笑顔で答え

る。

「冗談じゃないわ！信じれる訳ないでしょ!？」

「それもそうだな。じゃあこうしよう」

クレールはあらかじめ答えを知っていたかのように次の話に移す。

「シエーレに毒を盛った。解毒したければこいつらを殺して来い」

~~~~~

「な、なん、で……貴女が」

ここは帝都に存在する革命軍の密偵の拠点の一つだ。しかし現在この拠点にはすでに15体の死体と3人しか残されていなかった。

「これで全員か」

一人はクレール。いつもと同じ黒スーツと戦闘用の黒コート。もう一人は、ナイトレイドのマイン。

髪型も服装もいつもと同じ物。ピンク一色の目立って仕方のないが、今は無視しておく。

最後に椅子に座ったまま気絶しているシエーレ。

「ええ。15人ぴったりよ」

マインとクレールは取引をしている。

「反乱軍の密偵15人でシエーレの解毒剤を投与する」

「ああ、今から投与してやる」

解毒剤の入った注射器をシエーレの腕に刺し、解毒する。

「いやあ、見事だった。流石は狙撃の天才だな」

「……なによ、急に」

「純粹に誉めてるだけだぞ？ほら、俺ってよく誉め上手だって言われるだろ？」

「知らないわよ……シエーレ!」

話している間にシエーレが目を覚ました。薬がまだ抜けきっていないのか、ぼんやりとしている。

「シエーレ!シエーレ……」

「……あの」

~~~~~  
貴女は、誰ですか？

~~~~~

「え………何言ってるの、シエーレ？」

ぼんやりとした表情のまま答えた一言に、マインは顔を青ざめた。

「ごめんなさい、私は貴女が誰なのか知りません」

「あんだ、シエーレに何をしたのよ!？」

青かった顔を真っ赤にして、クレーエの胸倉を掴む。

「おいおい、俺はシエーレの解毒をしたただけだぞ？ただ………知らなかったんだ、副作用に記憶を消す効果があるなんて」

クレーエの放った一言に、目を見開いて後ずさる。

「う、うそよ。そんな、シエーレ！忘れてなんか無いわよね？」

クレーエの答えを聞いて、驚愕と絶望に顔を染める。

その瞳には涙が溜まっており、普段の強気な性格の彼女からは想像も出来ない位、憔悴しきっていた。

だが、

「ごめんなさい。私、本当に貴女が誰なのか解らないんです」

シエーレの答えは無慈悲にも、マインを否定した。膝から崩れ落ち、涙を流すマイン。

「これで契約は成立だ、マインは見逃してやるよ。シエーレ」

「ありがとうございます、クレーエ。さようなら、マイン」

二人の会話は泣き続けているマインには聞こえなかった。

パトロン

シエーレはクレーエと取引をしていた。

「マインを生きたままナイトレイドに返す。その代わり、お前は騎士団所属の帝具使いとして働く」

シエーレはその条件を飲んだ。その過程で、記憶喪失を装ってマインを拒絶させたのは単にクレーエの趣味だ。

「さて、シエーレの方はロランに任せるとして、後はセノアの修理用の素材だな」

これもおおよその目途がたった。

帝国にのみ生えている賢木と呼ばれる針葉樹。この樹には心材に多量の鉄分を溜めこむ性質がある。その量は、800年物ならば研いただけで剣として運用可能な程の量に達する。

更にこれを錬金術を用いた特殊な加工をすれば、堅く腐りにくい貴重な木材として重宝される。

他にも、稀少で強力な危険種の素材がいくつも必要だが、今のところは賢木だけでいいだろう。

「ちようどいいや、あれも持っていこう」

自宅の工房から出ると、木箱持つてある場所へと向かった。

くくく

「いや〜君が持ってくる茶葉と菓子には、外れが無いのお〜」

「いえいえ、こうして茶が楽しめるのも、アンゼルス老のおかげですよ」

帝都東部にある帝都では見慣れない創りの館。クレーエと立派な口髭の老人。そして喪服のような黒いドレスを着た少女が茶を飲んでいた。

アンゼルス老。元は地方の小さな商人だったが、現在は帝国経済の重鎮と言ってもいいほどの豪商となっている。

しかし、それは表の顔。実際は華業と呼ばれる麻薬取引、暗殺や殺人、密輸、密造、みかじめ料などの犯罪と、合法的なカジノ運営と金貸し等を活動の内容とする裏組織である。

（この爺さんなら、普通に交易だけでも十二分に食っていけるだろうに）

表には出さない。出せばアンゼルク一家はクレエと対立してしまう。逆にアンゼルクも、クレエと敵対するような真似はしない。（貴重なパトロンを、こんなところで失う訳にはいかんからなあ）（まだ、この小僧を真に理解できておらん。まだ対立する訳にはいかん）

「今回は、賢木をご都合していただくですね」

「おお、そうか。なら少し仕事を手伝ってくれんか？」

今までならクレエは貴重な資材や宝石を貰う代わりに、帝都でも貴重な茶器や、クレエが作った武器などの提供だけだった。

「珍しいですね」

アンゼルクは無言で人相書きを差し出す。

「この、レオーネという女なのじゃがな、家の金貸しから金を借りとるのに、返す素振りが無いんじや」

「とんだ悪党ですね」

「全くじや。仕事というのは、この女を連れてくることじや」

「了解しました。それから、これは以前西の異民族防衛線の近くの村で見つけてきた土産の品です」

そう言つてクレエは持つて来ていた木箱を渡す。

「ほほう、それはありがたい」その後も、日が暮れるまでチェスをしたり、茶を飲みながら話をした。

「おや、もうこんな時間か。ミカエラ、彼を見送りなさい」

「はい、お父様」

ミカエラと呼ばれた少女が扉を開け、クレエの退室を促す。

「それでは、今日はこれで失礼します」

~~~~~

部屋を出て、まっすぐ玄関へと向かう途中、ミカエラが振り返って睨みつけてきた。

「今回は、何を企んでいらつしやるのですか？」

「なんのことだ？」

ミカエラはアンゼルムの一人娘だ。しかし女は華業の長を継ぐ事は出来ない為、彼女は一家の商人として身を置くしかなかった。

「昨日、ミネルヴァ教導院の学者たちが、私の農園を訪れました」  
「教導院の連中が？」

西の王国の錬金術師や科学者が中心となっている研究教導機関。

「薬にも茶にもならないあの草。父が捨てようとしていたそれを彼らは買っていった。ですがその前に、あの草を調べていたのは貴女です」

やはり、この勘の鋭さは異常だ。

確かにあの草単体では、大した効果の薬にはならない。だが、帝国のどこにでも咲いている花の効能と、モルヒネを混ぜることによって攻撃性及び運動能力の向上、痛覚の鈍化、集中力の増加に血圧を急激に上昇させる薬を作る事が出来る。

その上、依存性が低く意識の混濁や感覚麻痺、下痢などを起こす以外の副作用らしい副作用もない。

ミカエラはクレールが調べた瞬間から、あの草が薬として利用できる事を知ったのだ。それと同時に、クレールにも薬として加工するにはミネルヴァ教導院の協力が必要であることも。

（毒薬とか、戦闘時に礼装としても使用可能な薬なら自信はあるが、ドーピングとかはまだDrスタイリッシュのほうがうまいんだよねあ）

「もう一度聞きます。あなたは、何を企んでいるのですか？」

その瞳には、秘密を隠している者を咎める目では無かった。

「何も企んでいませんよ。今は」

そう言っつて、屋敷を出る。屋敷の前に待機している馬車に乗って屋敷を離れる。

「やっば、ミカエラは邪魔だ」

ドS

「あ」

「なんだ、お前か」

クレールエは自身のステータスを呪った。

目の前には服を着たドSこと、エスデス將軍がいた。

「……………帰ってきてたのか」

「ああ、ついさっきな」

「どうやらエスデスとのエンカウント率を下げるには幸運A十なければいけないらしい。」

「北の勇者ヌマ・セイカはどうだった？」

「話にならんかった。期待はしていたのだがなあ」

「どうやら多少は期待していたようだ。もうすでに大臣と皇帝には報告を済ませ、ナイトレイド討伐に加わるらしい。」

「そこで、帝具使いのみの治安維持部隊を結成することにした。人数は11人」

「11？リヴァ、ダイダラ、ニャウの三人に、お前。後7人は？」

他にクレールエが知っている帝具使いで動かしても問題ない帝具使いは、少なくなる。

「ついでにお前と五大将の誰か……セノアかヒルダを入れる」

「俺もかよ。ま、お前と一緒になら狙われやすくなるし、ちようどいいかもな。くつくつく」

「相変わらずの悪巧みか」

「そう言いながらエスデスとすれ違う。」

すれ違い様に、エスデスが飛ばしてきた氷剣を無刃の魔剣で斬り捨てる。

「鈍って無いようで安心したぞ、クレールエ」

くくく

「あくはっはっはっはっはっは！ほらほらあ！喰われたくない奴はとつとと進めえ！」

拜啓フリーザ様……………じゃなかった。

拝啓、村に残した家族の皆様。元気に過ごしていらつきますでしょうか。

私はとても元気です。ええ、上司の飼っている危険種に追い回されながら、登山が出来る位に、元気です。

——事の発端は、クレール工將軍のこの一言だった。

「そうだ、新兵連れてフェクマでキャンプしよう」

フェクマとは、フェイクマウンテンの略称で帝都近郊では最も危険な場所でもある。

そこに何を思ったのか、クレール工將軍は新兵達とキャンプに来ていたのだ。

十中八九訓練だ。

「邪魔だあー！」

「きしゃああああああ!!」

正面を進むと、木獣と呼ばれる危険種が現れるが、難なく剣で斬り伏せる。このフェイクマウンテンは、擬態が得意な危険種が多く生息しており、観察眼を養うには持って来いな場所である。

現在訓練に来ている新兵は、総重量30キロのクレール工將軍監修新兵訓練用キャンプキットを背負って中腹まで登ってきている。更にいつも身に着けている装備類10キロの重量も合わさって、非常に動きづらい。

「うわあー！」

少し前を進んでいた兵士が攻撃を受けきれずに吹き飛ばされた。そのまま木獣に追撃される。

「おらあああー！」

手に持っていたタワーシールドで木獣の攻撃を受け止めると、木獣の背後にいた兵士が剣で突き刺し、とどめを刺す。

「な、なんで」

「俺が助けられたのに、俺を助けた彼奴を見殺しにして言い訳が無い」  
そう、この男本人は忘れているかもしれないが彼はこの男に助けられたことがあった。



「ほら、頂上まで行こうぜ。キャンプから帰ったら、飲みに行こうぜ」  
~~~~~

夜。フェイクマウンテンからかなり離れた位置。

(正確には北に7km進んだ地点)

シエレーとの取引内容にはナイトレイドの情報は入っていない。だが、クレーエはナイトレイドのアジトの場所をおおよそ割り出していた。

「大臣も異民族の傭兵を使ってナイトレイドの拠点を探させていた」
しかし、誰一人として帰ってこなかった。大臣が雇っていた傭兵たちは、特級危険種相手にやられるほど弱くない。

ならば何故帰ってこないのか。答えは簡単だ。ナイトレイドに消されたのだ。

「その方角は北。地点はこのあたり」

降霊術を使えば、死んだ人間の残留思念や靈魂を見つけることなど容易い。

「うーむ、外れを引いたらしい。帰るか——」
そう言つて後ろを向いた瞬間、

——葬る

背後からそんな声が聞こえた。アカメだ。

「曰く、人間の完全な死角はおおよそ120度らしい」

アカメの斬撃はクレーエの後頭部を捉えたかのように思えた。

アカメの斬撃は見えない壁のようなものに阻まれた。

「そんな無防備な場所を晒したまま、棒立ちでいると思うか？俺が」
「なぜ、ここにいる？」

「散歩だ。ホントだぞ？このあたりの霊脈レイラインは俺の計画に必要なだからな……おっと、君が多くを知る必要はない」

少し会話をするが、その後すぐにお互い武器を構え、睨みあう。

「なあ。もし、どんな願いも叶う理想都市を築きたいと言ったら、力を貸してくれるか？」

V S アカメ

「どんな願いでも叶う、理想都市？」

「そう。どんな願いも」

夜の森、にてクレールは一人の少女と対峙していた。

アカメ。元帝国政府の特務機関、暗殺部隊に所属していた暗殺者。

「断るー！」

その一言と共に駆け出し、肉薄する。アカメの持っている刀はただの刀ではない。

一斬必殺 ムラサメ。日本刀型の帝具で、効果は相手の身体に傷の一つつければそこから呪毒が回り、死に至るといふ凶悪な代物。

(とはいえ、斬られなければ問題ないわけだが)

アーミー・オブ・フアウニール

邪竜の血鎧に加え対刃コーティングテクスチャ、対刃防弾対炎性コートの上から斬られることはまずない。

「やられっぱなしはよくないな」

右の手の甲で振り下ろされたムラサメを弾き、左手でアカメの腹部を穿つ。

「——っはー！」

肺の空気がすべて抜け、吹き飛ばされる。

「立て。まだ戦えるだろう？」

くくく

ナジエンダに拾われてまだ浅い頃、帝具使いではないロクゴウ元将軍相手に舐めてかかった結果、殺されかけたことがあった。

その日から、クレールは鍛錬を欠かさなかった。転生前に得たあらゆる武の知識を基に鍛錬を重ねた。あらゆる体術を使いこなせるように訓練を重ねた。

皇拳寺拳法、カラテ、ルチャリブレ、六式、天童式戦闘術、八極拳、カポエラ、柔道、流水岩砕拳、バリツ、CQC、カラリパヤット、サバット、ボクシング。物理的に不可能な鼻毛神拳や難しすぎて習得不可能な北斗神拳、南斗神拳以外のほとんどの体術武術を修行し、現在進行形で鍛錬中である。

現在ではブドー大將軍相手に『帝具無しでの戦闘で、クレエに勝てるものはない』と言われるほどの戦闘能力を有していた。

「……来ないならこっちから行くぞ?」

構えを解き、脱力しながらアカメが立ち上がるのを待つ。アカメがムラサメを杖代わりにしながら、立ち上がる。

「指銃、虎突」

アカメがこちらを向いた時にはクレエはアカメと距離を詰めており、虎突が入る距離までいた。だが、アカメも今まで修羅場をくぐってきただけあってムラサメの柄でクレエの右腕を逸らして攻撃を避ける。

「天童式戦闘術、二の型十六番。隠禅・黒天風」

左足を軸に右足で回し蹴りを繰り返す。が、それも柄で受け止められる。

(至近距離のままでは勝ち目がないと思って、無理矢理距離を取ったか。しかもまた柄で防御しやがった)

先ほどの一撃を受けたことよって、冴えて来ているのだろうか。全体的に技が研ぎ澄まされてきていた。

「ソニックブームカラテ。イヤー!」

掛け声とともに突きを放つ。その際に放った衝撃波をまともに受けて、吹き飛ぶアカメ。木に直撃して落下する前に荊ソルの高速移動で接近し、技を繰り返す。

「天童式戦闘術、一の型十五番。雲嶺うねび毘湖鯉ひこりゆう?!」

下から突き上げるような鋭いアッパーカット。対するアカメは空中で身を捻り、軌道を逸らす。そのまま着地して、クレエに斬りかかる。月歩げっぽうで空中に逃げ、木の枝に着地する。

「やっぱり素手だけだと難しいな」

コートの中に隠しているナイフを取り出そうとした時、作業をさせていた自動人形から報告があった。

(オリジナル。霊脈レイラインの調整終了したぞ)

(了解した。エスデスが北の異民族を虐殺した場所が計画に必要な場所であった。西は部下達に任せておけば何とかなるからな)

「さて、アカメ。ここでの用事は全て終わった。帰らせてもらおうよ」

船上

「ふんふんふんふんふーふ、ふんふんふーふーん。ふんふんふんふふ、ふーふ、ふんふふんふーふん」

朝、クレーエは新兵達とのキャンプを終わらせ、汗を流した後すぐにいつもは着ない白のスーツに着替える。

ロイヤリティと余裕のある男はスーツをよく着る。それがクレーエがよく黒スーツを着ている理由だ。今回はその場の空気に合わせて、白のスーツを着る。

戦闘用のコートは着ない。装飾品兼戦闘用の魔術礼装も、無刃の魔剣と障壁の指輪のみにする。

「楽しみだ。竜船の完成セレモニー！」

くくく

大運河・・・全長2500km。

これを完成させるために帝国は100万人の民衆を動員し、わずか7年という短い期間で工事を終えた。

本来であれば7年という短い期間ではなく何十年とかけてやるべき工事だ。

期間が短いほど民への負担は大きく、それが帝国への不満をさらに高めた。

長い目で見れば運河は流通の動脈として間違いなく機能する。

(良識派の連中はそう考えて力を注いでいるが・・・)

今、クレーエが乗る竜船の完成セレモニーもその一環である。

「ふむ、華やかでいいな」

船内ホールを見ながら手に持ったグラスの中身を飲む。オレンジの酸味と共にやってくる桃の甘味、度数の高い酒特有の熱さが同時にやってくる。更にいつの間にも手にしたのか、皿の上には数種類の料理が並んでいた。

クレーエは芋しか食べない偏食家のようにも見えるが、美食にもそれなりに関心がある。そのうち、アンゼルムや新しいパトロンであるファンファン凰々フーズのコネを使って、食品関係に進出するのもいいだろう。

「久しぶり」

背後から聞こえた声に、食事の手を止めて振り向く。

そこには紫色の髪の毛の三つ編みにした、黒いシンプルなワンピースタイプのドレスを身に纏った女性が目の前に来ると小さく微笑んだ。

「久しぶりだな、T.T。^{ティーツー}いや、今はリュリエのほうがいいか？」

「ええ。今は任務中だから、そのほうが助かるわ」

今クレレーエの目の前にいるのは、T.Tことリュリエ。以前から反乱軍にスパイとして送り込んでいた五大将の一人だ。

「相変わらず変装が上手いな」

「でも気づいてくれたでしょ？ 限りなく素顔に近いけど、一応これも変装よ」

そう、彼女はクレレーエにしか素顔を見せたことがない。そのうえ彼女は、どこにいても違和感がないくらいその場の環境に溶け込める潜入能力を持っている。

(今にしてみれば、こいつほど有能な諜報員はいないよな)

どこにいても違和感がないということは、如何様にも暗躍が出来るということ。そして顔が知られていないということは、身元が割れることがないということだ。

「任務と言っていたが、内容を聞いていいか？」

「勧誘よ。帝国を憂いている同志を募ってるんだとか」

「そうか。何か俺から聞いておく必要のある情報はあるか？」

そう聞くとリュリエは少しばかり口を閉じて、考え始める。

「あまり正確な情報過ぎてても、疑われちゃうから困るのよ」

「確かにな。そうなるよ……」

帝具使いだけで構成された特殊部隊についての話がいいだろう。

これはそう遠くないうちに発表されるはずだ。

「なら、帝具使いだけで構成される部隊でどうだ？ そう遠くないうちに発表されるはずだ」

「それなら問題ないわ」

ウエイターからお互い色の違うドリンクを受け取り、乾杯とグラス同士を軽くぶつけて話を先ほどまでのとはまったく違う一般的なも

のへと変えるのだった。

激流 1

「私に賄賂はいらん。次やったら痛めつけるぞ」

「ぎゃー！もう充分痛いです!!!」

帝都メインストリート。エスデスが挨拶回りをしていると、帝都でもかなり宝番の高い甘味処『甘えん坊』の店主がエスデスに賄賂を渡そうとした。が、賄賂として渡そうとした小銭で目つぶしをされて、叫ぶ。

「一番高いやつをもらおうか」

「は、はいっ！ただいま……」

しばらく待つと、店主は巨大な……巨大すぎるパフェを持ってくる。

「お、お待たせしました！ツインベリー／クラッシュナッツ／キャラメルスクランチ／モカケーキ／カスタード&モンブラン／プリンアラモード・オルタです！」

一瞬、あのエスデスですら思考停止してしまった。だが、直ぐに復帰すると品名について考える。

(何かの早口言葉か？そもそも4品位同時に来たぞ？)

「オルタとはなんだ？この量と関係があるのか？」

「は、はい！オルタとは、オルタナティブ盛りの略称で通常の4倍サイズでの提供となっております」

「食べきれた者は？」

「今までに2人だけで……黒いコートを着た将軍と、金髪とアホ毛が特徴の少女です」

一人が確実にクレールエであることをエスデスはすぐに見抜いた。

「少女のほうは『この程度でオルタですか。たいしたことないですね』と最後に言い残して……」

「ふっ、いいだろう。私は常に屈服させる側だ。オルタ程度どうにかできねばなー」

そう言いながら、いまにも崩れそうなプリンを掬い取り口に運ぶ。「む？気配が消えた」

エスデスは正面に見える屋根を見る。

「誘いに乗らなかつたのか・・・残念だ。新しい拷問を試したかつたのだが」

そう言いながら、ブルーベリーとラズベリーのアイスを食べる。そのまま、下に埋まっているモカケーキを掘り進んでいく。

「今度は四人でつつくか・・・この名前の長いパフエを」

くくく

ホール内に笛の音が聴こえ始めてきた。それから徐々に異変が起こり始める。

乗客たちが次々と虚ろな眼で座り込んだり、床に倒れ出したのだ。がしやんとグラスの碎ける音がする。

「つと、大丈夫かりュリエ」

「ちよつとまずいです」

クレーエは片手でリュリエのことを抱き止めながら彼女の頬に手を当て顔を俺の方に向ける。

(顔色は悪くない)

恐らくこの音色を聴いた者にしか効かず精神を蝕むタイプの力だろう。

床に座り込む人々が口々に「やーめた」や「どうでもいい・・・」と言葉を発していることから感情にも効果があるようだ。

これは帝具の力で間違いない。それも三獣士だ。

「奪え、望むままに」

魔術回路を起動させ、防音のルーンで結界を張る。

「これで少しは大丈夫なはずだ」

「あ、ありがとう」

「・・・三獣士に俺の存在が気づかれると面倒だ。俺は船の外にへばり付くことにする」

もし、ここにナイトレイドが潜入していて、それを標的とした三獣士の作戦だとしたら協力を要請されるかもしれない。

「お前は船底に隠れている」

リュリエにそう言うと、船の外へと出る。適当な布を魔術で硬化し

て船に突き刺す。

「うまく固定できた。さて、この先どうなる?」

クレールエは使い魔の鴉を使って、船上を監視させた。

くくく

ブライトはインクルシオを纏うと、上に飛んだ。攻撃しようとした三人の刺客の内、2人をあしらい1人を瞬殺する。

「すげえ。兄貴って強ええって思ってたけど、めちやくちやすげえんだな!!!」

「おうっ!俺の兵士時代のあだ名は100人斬りのブライトだぜ?」

一緒に来ていたタツミに聞かれ、嬉しそうに答えるブライト。

「正確には、128人斬ったな」

ふらりと、一人の老齢の男が立ち上がり、ブライトと距離を詰める。

「その帝具・・・その強さ・・・やはりブライトだったか・・・!」

激流 2

「リヴァ將軍」

「もう將軍ではない……エスデス様に拾われてからは、あの方の僕だ」
かつて上司と部下だった二人の男が、敵として再会を果たした。

「味方なら、再会を祝して酒でも飲んでたろうが……」

インクルシオの副武装であるノインテーターを構え直し、言う。

「敵として現れたのなら……斬るのみだ！任務は完遂する!!」

対するリヴァも手袋を外し、帝具を見せる。

「それはこちらのセリフだ。任務は完遂する」

指輪型の帝具、水龍憑依 ブラックマリリン。

「主より授かった、この帝具でな」

水棲危険種が水を操作する為の器官を素材としており、装着者は振れたことのある液体なら自在に操れる。

水が大量に入った樽から、勢いよく水が噴き出て水柱を作る。

「お前達と戦う場所がここであることが幸運だ！」

「水使いか！水使いの部下らしい帝具だ！」

「私は水がないと無力だが……エスデス様は無から氷を生成できる」

帝具を嵌めている手に力を込めながら言うと、ブライトに対して攻撃をする。

「同格にはするなよ恐れ多い!!」

【水塊弾】。先端のどがった複数の水の塊を飛ばす技をブライトは副武装を正面で回転させて、防ぐ。

その間にリヴァは河の水を使って次の攻撃の準備をしていた。

~~~~~

クレエはリヴァとブライトの戦闘を鴉越しに見ていた。

「……ブライトは予想以上に強いな」

クレエもリヴァと同じ状況で戦っても勝てる自信はある。だが、ブライト相手には戦ったとしても

無傷で勝てる保証がない。

そうしているうちにも戦況は進んでいく。

蛇の形をした巨大な水塊で相手を押し潰す技、【深淵の蛇】を放つ。ブライトはそれを真正面から蛇を潰しにかかった。

『避けずに蛇を潰しに来ると信じてたよ。船が壊れたら大量の死者が出たからな』

リヴァは空中にいるブライトに対して帝具を発動する。

『だが、船の上ならともかく空中ならば避けれまい!!』

河の水が槍のようにブライトを襲う。

『水をかけられたぐらいで・・・俺の情熱は消えねえ!!』

ブライトはその攻撃を受けきった。しかしインクルシオの装甲が一部剥がれて、皮膚が露出していた。

『そう、あれではお前は死なない。分かっているつもりだ』

~~~~~

「お前とは数々の戦場を共にして来た」

河から、大量の竜の形をした竜型の水槍がブライトに向かって飛んで行った。

「その強さも、勇敢さも私が一番よく知っている・・・だからこそ！」

【水龍天征】

「最大最強の奥義を馳走してやる!!」

激流 3

空中にいたブラートに龍の形をした無数の水塊が襲い掛かる。

「やったか？」

それを放ったリヴァアがそう呟く。しかし、

「そういう台詞を吐く時はなあ、大抵やってねえんだよおおお!!」
顔を覆っていた装甲も剥がれ、重症なのは、明らかだ。ブラートは重力に逆らわず、落ちていくが、その先にいるのはリヴァア。全体重を乗せた一撃でリヴァアを倒す算段だろう。

だが、リヴァアも黙って攻撃を受けるつもりはない。

「奥の手、血刀刃！」

リヴァアは剣で手首を斬ると、そこから流れ出た血を刃にして飛ばした。

「ちっ！」

ブラートがノインテーターで打ち払う。

「あにきいいいいいいいいいい！」

タツミが叫びながら、ブラートに向けて剣を投げた。ブラートはそれを受け取ると、リヴァアに向けて振り下ろす。

「ぐはあ！」

「づあ！」

斬られた傷から血が噴き出し、それが血刀刃の第二波となってブラートの腕を切り落とした。

倒れる二人、駆け寄るタツミ。

「ナイスアシストだぜ、タツミ」

「兄貴、止血しないと」

タツミは着ていたスーツの上着を脱ぎ、ブラートの血を止めようとする。

「もう大丈夫だ。それより、まだ戦いは終わってないぞ」

そう言いながら正面を見る。

~~~~~

「ほう、あれがスクリームの奥の手か。いやしかしあの少年が三獣士

相手に互角以上に戦えるとは」

船の外にへばり付いていたクレールエは鴉越しにニヤウとタツミの戦鬪を眺めていた。

『タツミ、お前にこれを託す。インクルシオの鍵だ』

ブラートはタツミに対して剣を渡す。

『帝具との相性は見た目の第一印象でだいたい判断できる。お前ならできるはずだ、タツミ！』

因みにクレールエはほぼすべての帝具と相性最悪だった。試せなかつたデモンエクス、個人的には気に入っていたパンプキン、便利だとは思っていたスペクテット。他にも帝具を試してみたがどれもダメだった。

(神め、そこまでして俺の覇道の邪魔をしたいか)

別にいいし。帝具なんて雑魚じゃないし。

『熱い魂で叫べ!!』

『インクルシオオオオオオオオオオオオオ!!』

現れた鎧はタツミの身体に合わせて形を変えていく。

「やはり、まだ素材である超級危険種『タイラント』が生きていたか」

もし、その素材で人形を作ればどうなるか。自己呪撃式半永久機関を搭載させ、感情………自意識を与えればどうなるだろう。

「ほんと、飽きないなあ。この世界は」

『『おおおおおおおお!!』』

ニヤウとタツミの拳がぶつかり、衝撃が走る。ニヤウが反動でひるんだ隙を逃さず、タツミの一撃がタツミに入りニヤウが船の壁まで吹き飛ばされた。

こうして船上で行われた三獣士対ナイトレイドの戦鬪の決着はついた。

~~~~~

一方そのころ

レオーネは走っていた。

より正確に言うとお追われていた。

(相手はかなり速いな。だがエスデスが追ってきたわけじゃない)

ちよくちよく曲がり角を曲がって視界から外しているのにも関わらず、食いついてきているのだ。

「しゃーない、撃退するか」

そう言っって十字路で迎え撃とうとするが、

「っーはあ!?!」

十字路を重鎧、重装備の兵士に囲まれた。全員が全員タワーシールドを構え、隙間なく壁を作っている。

「こいつらがうわさに聞く騎士団か」

レオーネも帝具、百獣王化 ライオネルを使い、変身する。

「………帝具の使用を確認。武装の使用を許可する」

戦闘にいた老齢の騎士が言うと、全員の鎧と盾が淡く光りだした。

イクステインクシヨン・レイ

アカネが聞く

「ここが、クレー工軍の特別兵舎・・・」

私の名前は『アカネ』！現在は帝国軍クレー工將軍直轄部隊(クレー工軍)の情報工作隊に所属する普通の女の子。しかし裏の顔は帝国の未来を憂う革命軍のエージェント。

ナカキド將軍離反から数週間後、クレー工軍を含む帝国軍の大規模な人事異動のお陰でクレー工軍へと潜入することの出来たのだ。私は元々帝国軍広報隊に所属していた平兵士でもあるため軍に再入隊、密偵としてクレー工將軍の情報を持ち帰るといふ任務を受けているのです。

『まずは先輩方の話しを聞いてみると良い』

クレー工將軍は人事再編でやってきた兵士全員にそうおっしゃいました。というのも、クレー工軍の殆どがクレー工將軍が独自に行った訓練によって鍛えられ、クレー工將軍が独自に開発した装備で戦う。それをよく知る古株兵士の話を聞いて見識を深めると言っているようです。

クレー工將軍自体はとても穏やかな人に見えますが、味方にすら畏怖される人物です。しっかりと油断なく見ていきましょう。

「エーカー先輩はクレー工將軍の訓練キャンプには参加されたんですか？」

配属早々上官となった女性兵に聞いてみることにしました。訓練キャンプは革命軍内部でも有名で、クレー工將軍がこれを行ってから地方に配属された新兵の質が上がったという噂があるほどです。

「あー、あれね。閣下の部下の殆どが一度は経験するけど・・・控えめに言つて地獄ね」

ひ、控えめでも地獄とは一体。革命軍も打倒帝国、打倒エスデスに向けて訓練を欠かせないが、それとどこまで違うのだろうか。

「まず初日は楽なの。フェイクマウンテンとかマールグ高地みたいな危

険地帯まで移動してキャンプの準備をするだけだから。でも、二日目から2か月間本格的な訓練をするんだけどね・・・4人1グループ、言ってしまうえばフォーマンセルでの行動が何よりも神経を使うわ」

確かに。と、頷く。いきなり顔も合わせる事の少ない3人と作戦行動や共同生活をするというのは大きなストレスとなる。私も密偵の仕事抜きにしても遠慮願いたい。

軍全体としての連携力や一人が危機に陥っても残りのメンバーがフォローに入れるようにしたりなど、恩恵も多い。

「最初の訓練は朝4時に起きて4時間のランニング。上り坂も森の中も関係なく・・・基礎体力をつける為とはいえ、後ろから閣下のペットのジャバウオックが迫ってきてるのよ?しかも、遅れてるチームメイト助けなかつた場合粛清されるし。何度嘔吐したことか・・・」

――超級危険種ジャバウオック。

時速110キロの速度で一日中走り回れるスタミナと、帝具の材料にもなっているレアメタルでも傷一つつかない堅牢な身体をした化物。

それが私の後ろから追いかけてくる姿を想像して、ぞっとした。

「(それを、4時間!?ありえない!)ほ、他には!他にはどんな訓練をしたんですか?」

「そう、ね。いきなり紙で出来た箱を渡されて『十秒で判断しろ。危険なら捨てて、安全なら開けろ』って、言われたわ。危機察知能力を鍛えるって言ってたけど、中身は死なない程度の量の爆薬が入ってるの。四肢欠損したり、全身大やけどしたり、顔の半分焼け爛れたりした人もいたわね・・・」

「因みに、先輩は・・・」

聞いた瞬間、いきなり軍服の上着を脱いで腕を見せる先輩。義肢への交換をしていないその腕には痛々しいやけど跡があった。

「後はそうね、状況適応力の訓練としてナイフ一本で夜中にジャングルへ放り出されたわ。得意武器を持っていない状態での遭遇戦は、本気で死を覚悟したわ。他にも格上相手での戦術構築や工夫した集団戦闘、危険種の狩り方や罠の作り方・・・この辺りは比較的普通よ」

想像以上だ。これがクレール工軍の強さの秘訣。

「(このまま情報を集めて、少しでもクレール工軍への勝率をあげなくちゃ)」

~~~~~

「え？招待？クレール工将軍が私にですか!？」

配属から3日経った昼頃。突然クレール工将軍の昼食に招かれたのだ。

こういったことは珍しく、最近では滅多に無いとエーカー先輩が語る。なんとこの日だけはいつも食べている芋鍋(ジャガイモと肉類を煮込んだだけのもの)以外のものが食べられるのだとか。

「そ。簡単なカウンセリングみたいなものだと思っていけばいいから」

場所は宮殿内の将校専用食堂。自分の他にも最近配属となった兵士10名が招かれている。

「(でも・・・)」

私は嫌な予感を感じていた。今回招待された兵士の半分が私と同じ革命軍のスパイ。

—————もしかして密偵だとバレているのでは?と思っ  
てしまう。一度革命軍の本部で出会ったナジエンダ将軍にこう言われたのを私は思い出した。

『いいか、クレール工の懐柔能力と人心掌握術はかなり危険だ。一対一で会話をするな』

多少過剰に警戒しているとも思える。本当に懐柔力と人心掌握術が優れているのなら、革命軍に約100万もの兵が集まるはずがない。と、私もよく笑ったものだ。

—————この時私は今日の昼食は何かくなどと浮かれていた。上長していたといってもいいだろう。

## 狩人 0

ナイトレイドアジト内の訓練所。そこにはアカメ、タツミ、ラバツク、マイン、ブラート、ナジエンダがいた。

「ボス、兄貴もその恰好・・・」

「ああ。奪取した帝具を革命軍の本部まで届けるためにな。それと補充要員とブラートの治療とリハビリ」

ブラートの傷はタツミの行った応急処置の他にもミカエラという闇医者に頼って、何とか一命を取り留めた。

「ごめんよ、俺が弱かったばかりに」

「気にすんな！三獣士相手に互角以上に戦ったうえ、最高のタイミンで援護してくれた。にも拘らず腕一本持たてられたのは俺の弱さだ。お前が気にすることじゃねえ」

タツミの頭に手を置きながら言うブラート。

「大丈夫だって、手術とリハビリが終わり次第戻ってくる・・・。そのころには、お前が俺を指導する番かもな」

~~~~~

「レオーネの確保、ありがとうございます」

「いいって、仕事だからな」

夜。帝都郊外の隠れ家的な料亭。そこでクレーエとミカエラは話をしていった。

相変わらず喪服にしか見えないドレスを着た闇医者兼商人を見る。

父親であるアンゼルム老とは似ても似つかない赤い瞳、ナジエンダやエスデスに比べると劣って見えてしまう整った顔、全体的な線が細く痩せ気味な身体。

(女としては魅力的なのだが・・・)

普段から何を考えているのかわからないところから、不気味さしか感じられない。

「貴方は何故、將軍になったのですか？」

「唐突だな。一体どうした？」

「貴方の力、人望や人間力、才覚があれば、もっと別の道があったので

は?」

クレーエは深く考え込む。クレーエが反乱軍にいたら……『臣民よ立て! 怒りと憎しみを力に変えて、立てよ、臣民!! 革命軍は、諸君ら一人一人の力を欲している!!』

「ないない。俺はこうして、暴れる事しか出来んよ」

そう言いながら席を立つ。

「ご馳走様。会計は済ませてある、食後のデザートを三皿食べても釣りがるくらいな」

「そ、そんなに食べません!」

半ば怒りながら立ち上がるミカエラ。しかしクレーエはそちらを見ずにこう言う。

「ははは。誘ってくれてありがとうな」

襖を開け、いつも履いている戦闘用ブーツを履くと店を出て馬車に乗る。

馬車にはクレーエの護衛(自称)を務めるスカーと反乱軍に潜入しているスパイ兼ナイトレイドの補充メンバーの一人、TTティーツーが先に座っていた。

「デザート、楽しかったですか?」

「いや、一緒に飯食はいながら雑談のさぐりあしただけだよ?」

TTの発言に対して返答するクレーエ。TTはクレーエを睨みつけるが、クレーエはいに返さずに仕事の話をする。

「結論から言うと、短期戦でも長期戦でも俺らは負ける。このままだと」

「そうですね、反乱軍の総戦力はざっと100万。生産拠点も南方の本部に造ってるせいで補給線潰しも効きません」

「それにこちらは、辺境から無計画に搾取したせいで周囲への対応力が疎かになっている」

辺境太守の元に金や食料をある程度蓄えておけば、急な行軍の際にも中継基地として機能させることが出来る。更にはブドーやエステスのような強すぎる帝具使いが単騎で内乱や暴動を制圧してしまうこともあつてか、総合的な練度は低くなるばかりである。

「北の異民族、バン族、南の異民族を倒せたからつけ入られる隙は無くなったが、西の異民族がまだいる——東に異民族がないだけまし……」

クレールエは最後まで言いかけて脳裏にひらめいた、殆ど感といっても過言ではない思考に愕然とした。

「奴ら、安寧道の武装蜂起を狙っている。ボリックを殺す気だ」

その一言に馬車に乗っている二人は、クレールエの言いたいことを理解した。

「スカー。お前を含む100人をキュロクへ異動させる。人事には俺からなんとか言っておく」

「はっ！」

安寧道武装蜂起を食い止めれば、敵は西の異民族と反乱軍。他異民族を抱き込み独立を目論む太守と様子見している勢力以外の敵はいなくなる。

「大臣に強力したり賄賂を贈って計画させた帝都防衛線の構築は順調だ。スラムの蟲に金撒いて飯奢って働かせれば楽なもんよ」

帝都の外周に塹壕や地下坑道を掘り、機関砲やスナイパー用の盛り土。最終的には塹壕や地下坑道を、クレールエが大臣を丸め込んで建設させている国防監視塔という名の帝都をそのまま覆うことの出来る結界発生装置起動用の魔法陣にする予定でもある。

「とはいえ完成まで時間がかかる。が、奴らは春を待つ時間はない。だから稼ぐ」

その為の備えとして、対反乱軍の護りの要といっても過言ではないシスイカンまでの経路は騎兵隊対策にいつでも地面をぬかるみのできる量の水を地下に埋蔵させているし、シスイカンにも防衛用の仕掛けを作っている。

「まあ、ナカキド先生やナジエンダには100%バレてるけどな」

クレールエの用兵の師である二人は、クレールエの用兵を『ジメジメした陰湿なやり口』と評すほどである。

馬車が止まり、御者型人形が扉を開ける。

「そーいや、オネストが見合いの話を持って来てたな。TT断つとい

て」

「20代前半なんてあつという間ですよ、閣下。今のうちに身を固めては?」

スカーが冗談のつもりでかそんなことを言った。別に結婚が嫌ではないが、オネスト大臣の紹介というのが気に入らないのだ。

『お帰りなさいませ、ご主人様』

今日も今日とて玄関先では、目麗しいメイド達が出迎えてくれる。

「おかえりなさい、あなた♡」

目の前に棒付きキャンデーを啜えたオレンジの髪的美少女が立っていた。

「え?」

「へ?」

「はあ?」